



# 南三陸町被災者生活支援センターの取り組み

～「伝える」「つながる」「未来へ」～



2013年11月29日

南三陸町社会福祉協議会  
被災者生活支援センター

須藤 美代子



# 1. 志津川中心部の変化



△志津川中心部  
(被災前)

▽志津川中心部  
(被災翌日)





# 2. 支援センターの位置付け



2013/10/20現在

## 南三陸町

保健福祉課

◆保健センター  
65歳未満の  
異常時連絡先

◆福祉アドバイザー  
(本間照雄氏)

地域包括支援センター  
(町直営)

65歳以上の  
異常時連絡先

## 南三陸町社会福祉協議会

総務課

### 被災者生活支援センター

58仮設/1,813世帯/5,359人

本部

6名...企画、調整、庶務

志津川サテライト

17名...29仮設団地 704世帯

戸倉サテライト

13名... 11仮設団地 332世帯

歌津サテライト

17名...17仮設団地 488世帯

南方サテライト

12名... 2仮設団地 289世帯

みなし仮設班

12名... 県内対象 645世帯

町内

町外

※滞在型支援員49名 ... 17仮設団地

総務班

居宅介護班

災害ボランティアセンター

地域福祉課

通所介護班

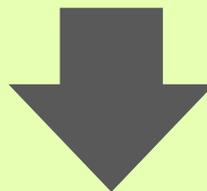
訪問介護班



# 3-1. 活動方針 ～ソーシャル・キャピタル～

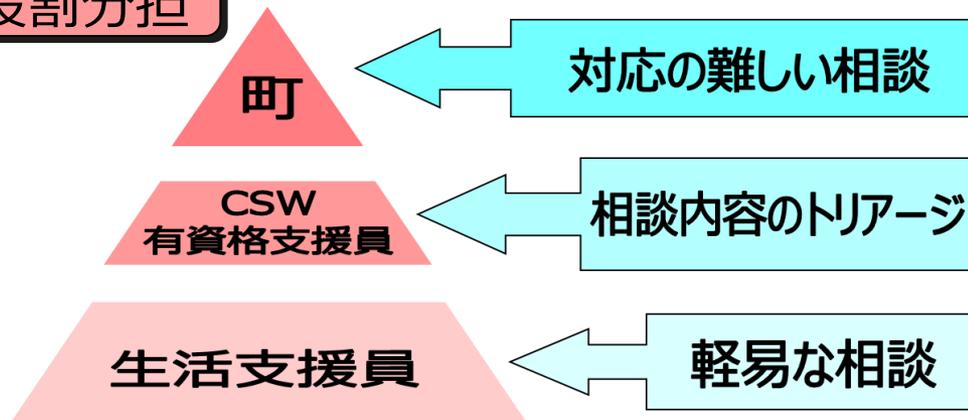


- ◎ 阪神淡路大震災で問題となった孤独死の教訓に学ぶ
- ◎ 地元にある社会資源を生かしたシステムづくり
  - ・町民を主役にする・地縁力を生かす・丁寧な対応と専門的対応の両立



地域福祉を見据えた被災者支援

## 役割分担



## 【ポイント】

- ◆ 三層構造による効率的・効果的支援体制
- ◆ 地元社会資源の活用・還元型事業設計
- ◆ ストレングスの視点を持った支援



## 3-2. 生活支援員の形態



### 【巡回型支援員】

- ・個別訪問で生活の様々な要望や相談を受け、関係機関につなぐ。
- ・コミュニティ形成支援を行う。  
→ 孤独死予防、仲間作りのきっかけづくり、生きがいや役割づくり 等



### 【訪問型支援員】

- ・県内の民間賃貸住宅（みなし仮設住宅）生活者を訪問し、帰郷の想いを支える。

### 【滞在型支援員】

- ・仮設住宅居住者が、同団地内の登録高齢者等の安否確認を行う。
- ・朝夕の見守りを行い、「お互い様」の精神が生まれるようにする。
- ・外出する機会の少ない独居高齢者や、本来は見守り対象になるであろう者から人選する。





## 4-1. 仮設住宅への訪問活動



生活支援員の最大のミッションは、見守り支援である。住民の不安や寂しさを傾聴しながら、**一人ひとりの気持ちに寄り添う**ことを心がけている。

住民と一緒に考え、共に活動し、地域の安心を作っていく。それは同じ体験をし、同じ南三陸町民であるからこそ、「**自分たちの町は自分たちでつくる**」ことを意識している。



- 支援員2名1組で訪問
- リスクレベルに応じて訪問頻度を設定



## 4-2. お茶っこ会



バラバラになったコミュニティを形成するため、住民が集える場や仲間づくりのきっかけを生活支援員が作る。それが地域の一員であることや生きがい作り、隣近所を気遣うという**「お互い様」という互酬性**を培っている。

今では生活支援員が働きかけずとも、各自治会が主体的に開催している。





## 4-3. ちょこっと運動



南三陸町の高齢者は震災前には、庭の草取りや畑を耕し、家業を手伝う働き者であったため、狭い仮設生活では運動不足になりがちである。

生活支援員が **おらほのラジオ体操（方言版）** で日常生活動作を高める。習慣化しているこの体操は、住民のニーズが高まり、馴染みの歌謡曲に合わせたオリジナル体操がある。

体操のあとは、仲間とお茶をしたり、畑仕事に行ったり、仮設の草取り・周辺掃除をするなど、屋外での活動に繋がっている。





## 4-4. 長生き坂



仮設住宅と住民の憩いの場「カフェあづまーれ」をつなぐ 幅2m 長さ10m 約30度の勾配の坂道である。仮設の高齢者は、**運動不足解消と仲間との気の置けないおしゃべりを楽しみに**、その坂を毎日往来する。

高齢者にとっては障害と捉えがちな坂も、「楽しみ」や「生きがい」を感じて利用してもらおうと、「長生き坂」と命名し、「効能」も付けて、住民に長く親しんでもらいたいという発想の転換をしている。



看板設置時にはセレモニーを実施して、全国ニュースに！



## 4-5. 再会さろん



震災によって様々な事情で南三陸町を離れざるを得なかった民間賃貸住宅（みなし仮設）生活者には、なかなか行政をはじめとする様々な支援が行き届かなかった。避難先の市町社協の協力のもと、**南三陸町民が集えるサロン**を開催している。

故郷の言葉で、南三陸町の人に再開できる喜びを分かち合う。南三陸町の人と会うと、いつまでも話が尽きない。

やっぱり南三陸町の人と  
会って話すのがいいね！





## 5. 地域との関わり



多くの施設・機能・システムを震災で失ったが、**顔の見える関係**があっこそ、人のつながりは安心・安全を生む。

滞在型支援員が日常の仮設生活を見守り、孤独死を予防し、異常の早期発見に努める。気になるケースは専門職に迅速に繋ぎ、必要な対処をするための情報を共有する。

住民の身近な存在である生活支援員は、後方支援に専門職がいるからこそ、最前線で住民の「声」に耳を傾けることができる。



滞在型支援員との  
情報交換会



東北会Hpの医師、CW、  
NSとのグループワーク



消防、保健師の同行による  
仮設住宅の防火査察



保健師、臨床心理士、  
精神科医、民生委員との情報共有



## 6. 今後の展望



### 【現場ではいま・・・】

生活支援員は、支援センター設立当初の混乱期から必死に走り続け、**常に仮設住民に寄り添い、傾聴することで信頼や信用**を得てきた。仮設住民の生活は、ようやく平常に取り戻してきているが、長期化する仮設生活で不安や焦燥感が見える。

### 丁寧な情報伝達と連携

私たちは細くても長く、住民に寄り添った支援活動を続けていきたい。時間の経過とともに多様複雑化する問題が多くなっており、他職種との連携や共同が重要となっている。住民と専門職・関係機関につながるのも生活支援員の役割。**伝える相手に合わせて説明できる能力**を身につけていく。



### 連続性・一貫性のある支援

これから仮設住宅から災害公営住宅への移行期、この事業を「被災者支援のみ」の活動とせず、ソーシャル・キャピタルとして育った見守り経験者を活用できるような**体制づくり**を意識する。

支援者の皆さんも震災復興を風化させないように  
現状を発信し、単なる援助ではなく、  
**被災住民の自立につながる支援** をよろしくお願いします。

ご静聴ありがとうございました。

